

(出典)

NHKブックス No.856

司馬遼太郎

「昭和」という国家(一部抜粋)

明治のその時期までの、いわゆる偉い人たちは、結局のところ、みな正直だということでした。

日本の米櫃にはこれだけしか米粒がないんだ、お金はこれだけしかないんだということを、わりあい正直に言っていました。

一方、ロシアは地球を覆うほどの大国であります。

ですから、とても勝てるものではないのですが、それをこういう具合にすればなんとかなるだろう、そして最後はアメリカに調停を頼めばいいだろう、つまり痛み分けというところまでもっていけばいいと、こういう感覚で始めた戦争だったわけです。小さな国としては、痛々しいほどの決断だったと思うのです。幸いにもうまく痛み分けになったのは、アメリカのセオドア・ローズペルト大統領(Theodore Roosevelt 1858-1919)が肩入れしてくれたおかげで、まずまずの結果になった。

ところが、終わってからがよくなかったのですね。

先日、アメリカのポーツマスという港町に行ってきました。軍港の町でもあり、きれいなニューイングランド風の家がたくさんあり、丘があつて美しい町です。そこで小村寿太郎(1855~1912)という日本の外務大臣と、ウィッテ(Sergei Yulievich Witte 1849~1915)という、ロシアの皇帝の全権大使とが談判しました。小村は、大きな要求は出せないということは知っております。

ロシアにその気があれば、戦争を継続できるのですから。とても賠償金までは要求できないものですから、非常に小さな要求しか出さない。

さらに、小村はそのために国民全体から非難されるだろうということも覚悟しています。政府も非難されるだろうと覚悟しています。

日比谷公園、あるいは神戸、大阪、その他で国民大会が次々に開かれた。講和条約でもっと金を取れとか、屈辱的だとかですね。日比谷公園に集まった群衆はほうぼうに火をつけたりしました。

江戸時代にも群衆はあります。たとえば一揆を起こします。ところが、これは統制されたものですね。

ところが日比谷公園の群衆は違いました。日本の歴史の中で、一種の国家的なテーマで群集が成立したのは、このときが初めてです。

この群衆こそが日本を誤らせたのではないかと私は思っています。

彼らが、ロシアからたくさん金を取れ、領地を取れと言うのは、つまり日露戦争というものを勝ったと思っているからですね。

実際、勝ったことは勝つたでしょう。勝利の見返りの領土と金をたっぷり

取れということが、そういう形で沸騰したわけであります。

人民が集まって氣勢をあげるということが正しい場合もありますが、日比谷公園に集まった群衆は、やはり日本の近代を大きく曲げていくスタートになったと思います。

もしそのときに勇気のあるジャーナリズムがあって、日露戦争の実態を語っていればと思います。満州における戦場では、砲弾もなくなりつつあった。これ以上続けば自滅するだろう。そういうきわどい戦争だったのだということが正直に書かれ、日本という国はその程度の国なんだという自己認識が明快に文章で提示されていたらと思いますね。国民は自分についての認識、相手についての認識がよくわかったらと思うのです。

しかし、そういうジャーナリズムはなかった。もしあったとしても、おそらく官憲の手でつぶされたらと思います。自費出版しても、あるいは秘密出版しても、勇気をもってする者はいなかった。

そして戦争に勝ったとたんに、軍部および政府は日比谷公園で沸騰している群衆と同じように、——自分が戦争の状況を全部知っているくせにですよ——不正直に群衆のほうにピントを合わず。そんな気分が出てきました。それがやがて大きく曲がっていく。